

ワード  
ゴルドン

及上海に出せり。時に文宗崩じて穆宗同治帝位に在りしが、帝の援を外人に請ふに及び、米人「ワード」は洋槍隊を編じ、賊を討ちて常勝軍と稱せられ、尋で英人「ゴルドン」亦た能く兵を用ひて連りに賊軍を撃破せしかば、是より賊の兵氣頓に挫け、西紀一八六四年に金陵陥り、秀全毒を仰で死し、餘衆亦た尋で剿絶せられたり。

### 第七章 清魯の關係 附回部の亂

聖 英明の資を以て滿州勃興の餘威に籍り、大に内治外交を勉め、國運頗る隆盛を致せしかば、魯西亞も尼布楚の條約に一步を退讓し、姑く清の邊疆を窺ふる能はずりしが、其後、漸く東侵の政略を進め、西紀一六九〇年には東察加を略し、尋で「アラスカ」を蠶食せり、已にして清

西伯利亞事件

照一六四頁參  
照一七〇頁參

照一七一頁參  
恰克圖條約

照一七一頁參  
ニコライスク  
照一八五頁參  
愛琿條約  
照一八六頁參  
ウラフナストク

の外蒙古を平ぐるや、魯は頻りに通商條約の協定を迫り、西紀一七二八年清世宗魯新に恰克圖條約を結び、恰克圖を以て兩國の互市場と定めたり、爾後魯は益盛に其の東方侵略を經營し、十九世紀の初に至りて、「ニコラス」一世の立つや、清の屯田兵制、漸く弛廢せるに乗じ、漸次に黒龍江を下り、其江口に「ニコライスク」を建て、尋で薩哈連島を蠶食し、更に又、清の内亂外寇に苦むるに乗じて、國界改定の議を迫り、西紀一八五八年清文宗魯、亞歷山二世、愛琿條約を結びて、悉く黒龍江以北の地を収め、烏蘇里江東岸の地を以て兩國の共有地と定め、且つ烏蘇里江、松花江の通航權を獲たりしが、後二年を経て、清の英佛と北京條約を結ぶに當り、魯國公使は其間に斡旋せしにより、其報酬として、全く烏蘇里江東の地を収め、ウラ



回部の亂

照一七四頁參  
照一八一頁參

東干族の反

阿古柏

左宗棠

伊犁事件

シナストックを建て、益、東方經略に盡瘁せり。

先きに、高宗の天山南路の地を討平するや、回教徒を虐遇せしかば、其徒之を悦はず、浩罕汗之れに乗じて侵入し、西紀一八二六年西域の地大に亂れたり。然るに、清は、仁宗以來常に内亂外寇の苦むる所となり、國力大に疲弊せしかば、河西の回教徒なる東干族も亦た之を機として、兵を甘肅に舉げ、西紀一八六二年所在の回教徒を煽動せり。時に喀什噶爾人阿古柏なるものあり、別に兵を舉げて喀什噶爾を陥れ、尋で東干族を降服し、遂に天山南路を統一し、好を英、佛及び土國に通じて清に抗せしかば、清は左宗棠を以て陝甘總督となし、西紀一八六八年屢賊軍を撃破し、西紀一八七八年に至りて漸く之を鎮定せり。是時に當り、魯國は頻りに中央亞細亞の地を蠶食し、遂に

前項參照

リワフヤ條約

波斯

伊犁と境を接するに至りしが、偶伊犁に叛徒あり、天山南路の紛擾に乗じて、兵を起し、其國大に亂れしかば、魯國は邊境を安んずるを名とし、兵を出して伊犁を占領せり。已にして左宗棠の天山南路を戡定するや、清の今帝即光緒帝は、魯軍の撤去を要求し、遂にリワフヤ條約を結びしが、後、之を廢棄し、更に、魯は、コルゴス河以東の地を清に還附し、清は償金九百萬留を魯に與ふべきことを約して、局を結べり。西紀一八八一年

第八章 英魯の關係(中亞附近の形勢)

西紀一七九四年、今の波斯王家の祖「アガムハメド」土耳古族なるもの、波斯を統一するや、英國は之れと同盟して、佛魯同盟に當り、以て其の印度に侵入せんとするを防ぎし



亞富汗

亞富汗に於ける英の勢力

が。其後、波斯は魯國に擊破せられて和を請ひ、爾後永く魯國の同盟國となれり。西紀一八二八年

西紀一八二六年「ドスト、ムハメド」なるもの「カブール」に起りて、亞富汗を統一せしが、英國が其廢王を保護せしを怒り、魯國と結西紀一八三七年びて、英國と難を構へしかば、英國印度總督は兵を出して頻りに「ドスト、ムハメド」を討破せり。然るに、亞富汗人は英國の處置を悦ばず、群起して英軍の歸路を扼し、大に之を破り、追撃して西印度を擾がせしが、尋で和議を講せり。西紀一八四九年

中央亞細亞

魯國の中央亞細亞經路

是より先き、魯國は十八世紀の始より中央亞細亞の侵略を圖り、先づ「吉利吉思」族を従へ、土耳其斯坦を略し、尋で「ボクハラ」「キワ」「浩罕」「三汗國」の互に相攻伐せるに乗じ、次第に其地を蠶食せしかば、英國は其南下の勢頗る盛な

英國亞富汗を降服す

るに恐れ、新に亞富汗王と攻守同盟を結べり。然るに其後、亞富汗に内亂生じ、且つ魯國は陰に之を使喚して英國と絶たしめしかば、英國印度總督は遂に征討して大に之を破り、其東隅の地を奪ひて、和を許るにたり。西紀一八七九年

亞富汗事件

己にして、魯國の侵略は益、其歩武を進め、殆んど其の中央亞細亞經路を了りしより、遂に亞富汗を侵し、「ヘラット」に迫りしかば、英國復た默視するを能はず、亞富汗を助けて異議を唱へしが、兩國の使臣會見數次の後、西紀一八八七年に至りて其境界を協定せり。尋で、兩國は波迷爾の境界に就て紛議を生せしが、亦た西紀一八九五年に和局を結べり。

波迷爾事件



第九章 清佛及佛英の關係(後印度の形勢)

越南の新興  
照一七七頁參

暹羅

東埔塞

向きに廣南の滅ぶるや其王族阮福映は佛國宣教師の保護を得て暹羅に逃れ尋で暹羅王フアヤチヤツクリ及び佛國の援助を籍りて遂に安南を統一し西紀一八〇三年國を越南と號せり。已にして暹羅は東埔塞の内亂に乗じて之れを討滅せんとせしかば越南は東埔塞を援けて之と争ひしが却て敗衄を取りて東埔塞は暹羅の征服する所となり、越南亦た其勢を失へり。

佛國の安南  
征討

初め福映の援を佛國に請ふや事成らば化南島を割讓すべきことを約せしが其の安南を統一するに及んで前約を履行せざりしかば佛國は之を怒りて兵艦を派遣し柴棍チイゴンを占領し西紀一八五八年遂に南部交趾支那の地并に償

東埔塞佛國の  
保護國となる

安南佛國の保  
護國となる

金二千萬法フランを得西紀一八六二年たりしが尋で又た其翌年に東埔塞を以て其保護國となせり。

然るに越南は佛人の奸猾を惡みて屢之れと衝突せしが佛國は遂に耶蘇教の自由宣布と紅河の通航權とを強取し且つ擅に兵員を派遣して各府に駐在せしむるに至りしかば越南王は長髮賊の殘將劉永福即黑旗軍將を招きて佛兵を撃退せしめ佛國と戰を開きしも佛兵が越南の國都順化府を陥るゝに及んで越南は和議を懇請し遂に東京地方を割讓し且つ自今佛國の保護國たるべきことを約せり西紀一八八三年

清佛の衝突  
一七八、二四  
一頁參照

然るに安南の地たるや古より歷朝みな支那に朝貢せしを以て清は此の和約を承認せず曾紀澤を巴里に派遣し極力抗議せしめしも要領を得ると能はず遂に兵を



英佛の交渉  
一八〇頁參照

交ふるに至りしが、佛の水師提督「クルーベ」が清の福建艦隊を全滅し、澎湖島を占領するに及んで、清は遂に佛・南の和約を承認して、和親を訂せり。西紀一八八五年  
已にして佛國は益其慾を逞くし、暹羅に強迫して湄公河メコン以東の地を割奪せり。西紀一八九三年是に於て、英國は其南方支那に於ける勢力の、佛に侵害せらるゝに至らんことを慮り、佛國に交渉して、兩國領地の境界を協議し、湄公河上流の地凡う五十英里を以て中立地と定めたり。

### 第十章 日清韓の關係

附最近事件

琉球は第十四世紀の終より、我國及び支那朝明に臣禮を執りしが、西紀一六〇九年後陽成天皇慶長十四年島津家久之れを征服してより、永く我が屬國となれり。然るに又た、臺灣は聖

琉球事件

西郷從道臺灣を伐つ

日清談判

沖繩縣

祖の時より清の版圖に入りしも、其生蕃は獐惡にして殺戮を好み、屢害を琉球の漂民に加へしかば、副島種臣の清に使して通商條約を結ぶに當り、此事を以て清に詰りしに、清は臺灣を以て化外の民なりと稱して、其交渉を避けたり。然れども、西紀一八七四年明治七年西郷從道の兵を率て生蕃の地を討平するに及んで、清は前言を食み、遽に異議を唱へて、撤兵を我に要求せり。是に於て、我國は大久保利通を天津に遣して談判を開かしめ、和親殆んど破れんとせしが、英國公使の調停によりて、遂に償金五十萬兩を得て、和局を結べり。而して琉球の我が版圖たることも亦た、此舉によりて確定せらるゝに至りたれども、其後、西紀一八七七年明治十年我政府が琉球王を廢して沖繩縣を置くに及んで、清は又異議を唱へ、



朝鮮  
大院君

大に我施政に不平を懷けり。

朝鮮は、仁祖以來、歷世清の封冊を受けしが、西紀一八六三年孝明天皇李熙、王たるに及んで、其實父大院君李昰應、攝政となり、鎖國主義を固持して、耶蘇教を嚴禁し、遂に佛西紀一八六六年米西紀一八七〇年の軍艦を江華灣に砲撃せしむ、幸に事端を開くに至らざりしが、西紀一八七五年明治八年同砲臺の我雲揚艦を砲撃するや、我邦は黒田清隆をして其罪を問はしめ、遂に、朝鮮は自今獨立國として我日本と對等の交通をなすべく、且つ仁川・元山の二港を開きて互市場となすべきを約せり。西紀一八七六年是に於て、米・英・獨魯佛の諸國も亦た相繼で我例に倣ふて、通商條約を訂結せり。

政權閔氏に歸す

己にして、王熙、年漸く長じ、政を親らするに及んで、王后閔

江華灣の砲撃

日韓條約

壬午の變

氏權才あり、悉く政權を以て外戚の手に移せしかば、大院君頗る不平なり、西紀一八八二年明治五年京城の鎮兵を煽動して閔族を斃せしが、亂兵は勢に乗じて我公使館を襲撃せり。是に於て、我國は井上馨を遣して之を詰問せしめ、償金五十五萬圓を徴し、且つ爾後我公使館に護衛兵を駐在せしむべきを約せしかば、清國は我勢力を抑制せんが爲めに、亦た兵を朝鮮に派して其の公使館を護衛せり。是より先き、朝鮮は事大獨立の二黨に分れ、事大黨は大國清に事へて其國を維持せんとし、獨立黨は日本に依頼して獨立國の體面を保全せんとせしが、是に至て其軋轢益甚しく、西紀一八八四年明治七年獨立黨の領袖、金玉均・朴泳孝等兵を起して事大黨の領袖、閔泳翊等を殺し、援を我公使に請へり。然るに此時に、

事大黨  
獨立黨

甲申の變



天津條約

清兵は事大黨を助けて、獨立黨を擊破し、遂に我公使館を燒却せしかば、我國は復井上馨を朝鮮に遣して、償金十三萬圓を徴し、更に伊藤博文を清國に遣して、李鴻章と天津に會見せしめ、兩國共に朝鮮の駐在兵を撤し、爾後若し兵員派遣の必要起る時は、必ず先づ互に相通知すべきを約せり。之を天津條約といふ。西紀一八八五年即明治一八年

日清の衝突  
東學黨の亂

西紀一八九四年明治二年朝鮮の南部に東學黨西教を斥けて東學者の亂起りしが、其勢漸く盛なるに及んで、朝鮮は援兵を清に借りしかば、我國も亦た兵を出して居留民を保護し尋で清國に對して、兩國相提携して朝鮮を誘掖せんことを商議せしに、清は之を斥け、却て天津條約を無視して我に撤兵を要求せり。是に於て、兩國の平和遂に破裂して、牙山、成歡、豐島の戰となり。我第一軍總督山縣

日本の全勝

馬關條約



李鴻章

有朋は平壤の清兵を擊退して、遼東に侵入し、尋で、我海軍は清の北洋艦隊を黃海に破りて、其戰鬥力を奪ひ、我第二軍總督大山巖は之に乗じて直に金州に上陸し、旅順口を陥れ、別軍も亦た威海衛、澎湖島等を攻陥せり。清國遂に敵すること能はず、李鴻章を遣して和議を請ひ、伊藤博文、陸奥宗光と馬關に會見して、媾和條件を定めたり。即ち清國は朝鮮の獨立を承認し、償金二億兩を出し、遼東半島及臺灣、澎湖二島を割讓し、且つ新に沙市、重慶、蘇州、杭州の四港を開放すべきを約せり。然るに、遼東の我版



魯獨佛三國同盟

圖に歸することは、魯國の東亞經略に影響する所、實に大なるを以て、魯國は之を悦ばず。遂に獨佛二國と連合して、我國に勸告する所ありしかば、我國は其言を納れて、遼東を清に還附し、其代償として、金五千萬兩を得たり。實に西紀一八九五年明治二十八年なり。

最近事件

獨逸の膠州灣占領

今や、歐洲の列強は、皆互に其の羽翼を東方に伸張せんと圖れるの秋に際し、清は我邦との戦に敗れて、國力大に疲弊せしかば、西紀一八九七年、獨逸は其國の宣教師が山東省に於て兇徒に害せられしを奇貨とし、口を宗教保護に籍りて、膠州灣を占領し、清に強請して九十九年間借用の事を承諾せしめ、又其翌年に、魯國は滿州境域の防衛を名として清を威嚇し、大連灣及旅順口を二十五年間借用地とすべき事を約定せしかば、英國も

魯國の遼島占領

英の威海衛占領

東洋の風雲

亦た清に迫りて、東洋の均勢を保たんが爲めに、魯國と同期間、威海衛を領有するの議を承諾せしめたり。爾後、佛國・伊國等も亦た、巧に口實を設けて、獨魯の跡を襲はんことを計りしも、未だ其志を遂ぐるに能はず。然れども、清は其國是、今に於て尙ほ未だ確立せず。政變頻りに起り、民心常に疑懼を懷き、外敵往々其の釁に乗じて暴慾を遂行するを免れず。加ふるに、朝鮮・暹羅・阿富汗等の諸國も亦た其勢頗る振はずして、歐洲列強が勢力の競争地となり、暗雲慘憤、常に東洋の天を蔽ひ、何の時、何の地に、大波瀾の生ずるやを豫知すべからず。我が東洋史を緝くもの、宜しく心を此に留むべきなり。

第十一章 清の制度文教



官制

中央政府

四頁参照

地方廳

軍制

官制は、内閣に大學士及び協辦ありて樞機に參預し、吏・戶・禮・兵・工・刑の六部に尙書長官侍郎次官ありて内政を統理し、總理衙門は外交を掌り、都察院は彈劾視察の事を掌り、又大理藩院は外藩滿州以外の庶政を掌り、別に軍機處を設け、大學士及尙書より勅選して軍機大臣となり、軍國の大事を議定せしむ。其地方制度は、一省或は兩三省に一總督ありて、管内に於ける文武の大權を掌握し、其下には提督軍務部長巡撫內務部長あり、巡撫の下には布政使財務官按察使司法官あり、其他に、知府・知州・知縣を置て、府・州・縣の統治に任ず。但し、滿州には特に將軍を設け、又、他の外藩部の官吏は、大抵元の酋長を以て之に任用し、而して、京官は漢人と滿人と其數に於て相半はせしむ。軍制は、陸軍に八旗・綠旗・勇兵等あり、八旗に、滿州・八旗・蒙古

陸軍

海軍

學藝

儒學

詩文

著書

宗教

一六五、一六六頁参照

八旗・漢軍八旗の三種あり、綠旗は漢人を以て組織す。而して、其海軍には北洋・南洋・福建・廣東の四艦隊及び別に長江水師を設けたり。儒學は、顧炎武出で、考證學を創め、惠棟出で、漢學を唱へたり、閻若璩・毛奇齡・胡渭・王鳴盛・錢大昕・姚鼐等は皆、一世の大儒にして、侯方域・魏禧・方苞・朱彝尊等は詩文を以て有名なるものなり、淵鑑類函・佩文韻府・康熙字典・大清會典・四庫全書提要等の書は、康熙・乾隆の際に勅選せられ、爾後の歷朝に於ても諸經解・叢書類の編刻、頗る盛行はれ、歴史・地理・小説・文學に關する好著亦た甚た多し。耶蘇教は、明末の頃、北京及廣東地方に、ゼン・イット派流行せしが、清の聖祖も亦た之を保護し、且つ其教徒を任用して、西人の天文・曆數・砲術等を傳習せり。然れども、世宗即



耶蘇新教  
一八六頁  
和條件參照

佛教

喇嘛教

回教

位の初年に、令を下して其布教を嚴禁せしかば、一時大に其勢を失ひたりしが、輓近に至り、新教流入し、廣東福建附近に弘布せられてより、其勢漸く盛にして、今や全國各省に傳播せられんとせり。  
佛教及道教は各省に普及せらるれども、其勢氣太た昂らず。殊に佛教は、乾隆以來屢政府の干涉を蒙り、非常の衰運に向へり。喇嘛教は、圖伯特蒙古、直隸、山西、陝西、甘肅等に行はれ、回教は天山附近及び直隸、陝西、甘肅等に行はる。

### 東洋史綱終

明治三十三年二月十日印刷  
明治三十三年二月十三日發行

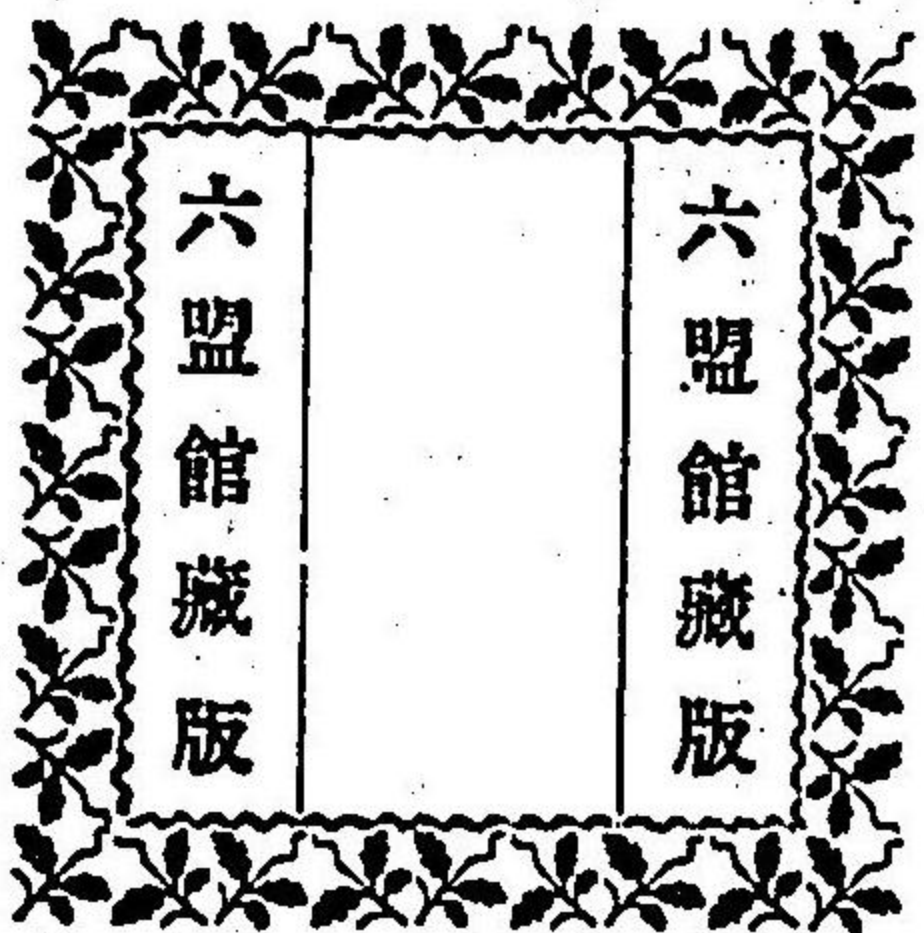
東洋史綱  
定價金七拾錢

著者

發行者

六盟館藏版

六盟館藏版



印刷者  
印刷所

發行所

- 丸井圭次郎 東京市麹町區四番町七番地
- 長嶋恭三郎 全市日本橋區大傳馬町貳丁目廿二番地
- 杉本七百丸 全市日本橋區本石町三丁目廿四番地
- 柳原友吉 全市全區鐵砲町三番地
- 目黒甚七 全市京橋區南傳馬町二丁目五番地
- 小林喜太郎 全市日本橋區本石町三丁目拾七番地
- 橘磯吉 全市京橋區區弓町廿三番地
- 三協合資會社 全市京橋區區弓町廿四番地

全市日本橋區大傳馬町貳丁目  
六盟館



# 東洋史綱參考書 近刊

本書は、東洋史綱を講究するものゝ便利を  
圖り、東洋に於ける

沿革地圖

各國帝王系譜

支那歷朝興亡表

支那歷代帝都表

和漢洋對照年表

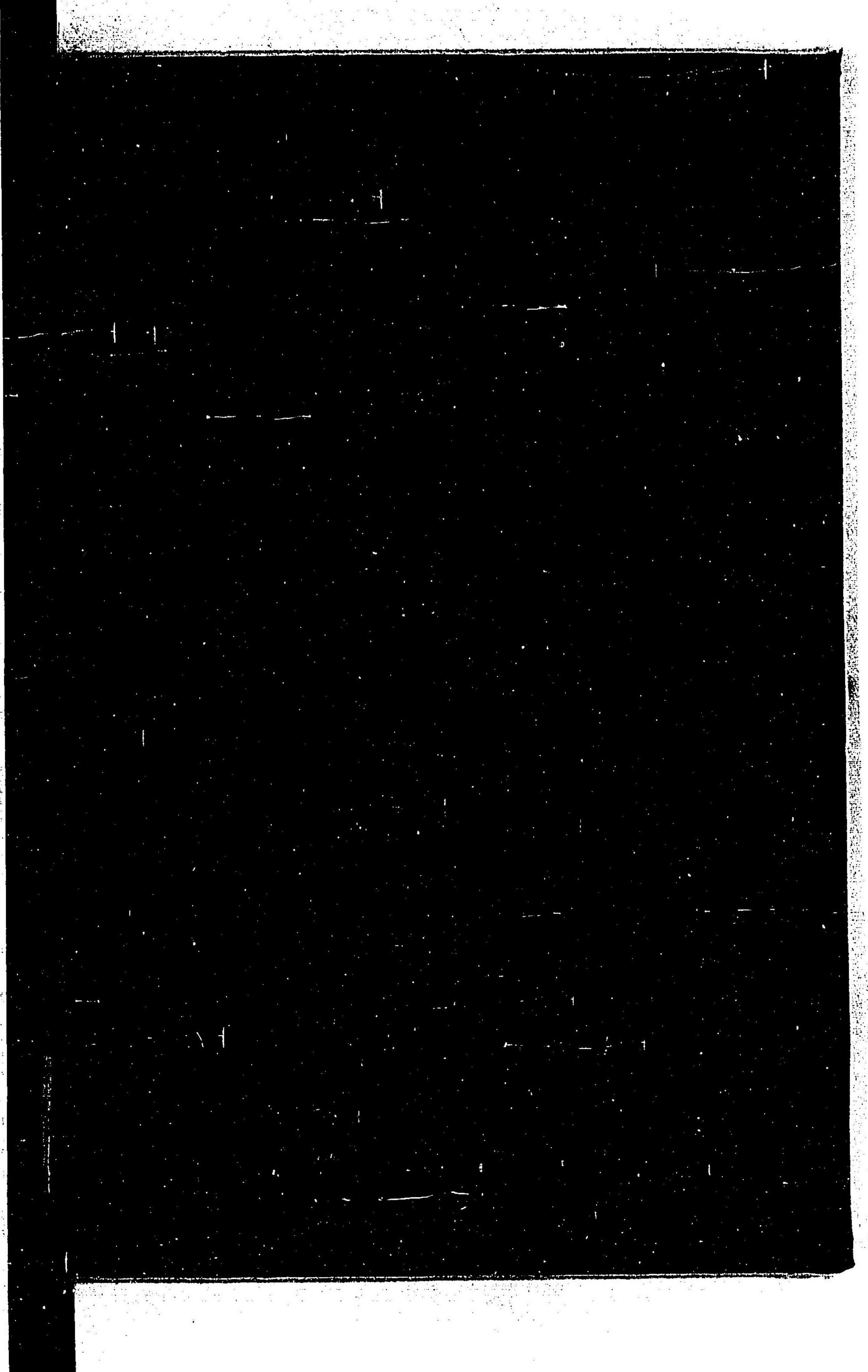
索引

等を合して、別に一冊となせるものなり。



86
115







003353-000-7

86-115

東洋史綱

丸井 圭次郎 / 編

M33

ACC-1858





